

(c) 教育課程の編成および指導方法等について

教科			学年	1 年		
	科目・標準単位数		類型			
国 語	国 語 総 合		4	5		
歴 地 史 理	世 界 史 A		2	2		
	日 本 史 A		2	2		
数 学	数 学 A		2	2		
	○	S S 数 学 I	3	3		
理 科	○	S S 物 理 基 礎	2	2		
	○	S S 生 物 基 礎	2	2		
保健 体育	体 育		7～8	3		
	保 健		2	1		
芸 術	音 楽 I		2	2	2	
	美 術 I		2	2		
	書 道 I		2	2		
外 国 語	コミュニケーション英語基礎		2	1		
	コミュニケーション英語Ⅰ		3	2		
	○	S S 英語表現Ⅰ	2	2		
家 庭	家 庭 基 礎		2	2		
○SS研究	○	S S 研 究 基 礎	1	1		
	○	S S 特 講 Ⅰ	0～1(1)	0～1(1)		
各学科に共通する各教科・科目の計				32～33(1)		
合 計				32～33(1)		
特別活動	ホームルーム活動			1		

- ・今年度のSSH対象学年は1学年のみであり、左図のような教育課程で、1校時の時間はそれぞれ50分で実施した。図中〇を付した教科科目は学校設定である。
- ・このうち、「SS数学I」「SS生物基礎」「SS物理基礎」「SS英語表現I」については、それぞれ「SS」を付さない科目の教科書を用いて、従来の授業形態を踏まえ、一部の単元においてSSH対応の授業を展開した。主に本研究の「仮説3」の検証に関わる実践であり、文理融合・教科横断授業ならびに発展的な内容を展開することができた。そのため、学校設定教科「SS研究」の実施の際には、生徒の理解が容易となる場面が見られた。これは、「仮説1」の検証とも重なる部分でもあり、効果的な探究活動を実施することができた。

- ・「仮説2」の検証は、主に「SS特講I」での実施内容によるものであるが、コロナ感染拡大の影響で計画通りに実施できなかった。その代替として実践した本校教員(物理・化学・生物・地学・数学・英語)による「探究ゼミ」では、教科科目を超えた内容の実験実習を行うことができたので、生徒の科学研究に対する興味関心は高めることができた。しかし、生徒自身が研究課題を発見しそれに取り組むという場面を設定するまでには至らず、次年度での取り組みの方法を検討したい。可能であれば大学の研究者(教官・大学院生など)の協力を得て、共同研究のような形で課題探究できるように進めていきたい。
- ・今年度は、まだ1学年だけの取り組みであり、試行錯誤の連続であった。特に「SS研究基礎」における指導では、基本的に週に1時間だけの取り組みであったため、効率的に時間を活用するためのシラバスを分掌から提示すべきであった。学年の担任団の創意工夫により、なんとか乗り切った感がある。誰が1学年担任となっても同じような取り組みができるように、「SS研究基礎」シラバスを整備する必要がある。
- ・計画では1学年の後期で、生徒各自が課題発見およびその解決のための「ミニ課題探究」を実施する予定であったが、週1単位時間での展開では時間が不足し、解決まで導けないことがわかった。したがって、今年度では生徒各自のSDGsに関する課題発見まで進め、2学年でその解決のための研究を行うように一部で計画変更を行った。
- ・「SS研究基礎」の実実施時数は42時間に上り、1単位時間の法定時数を大きく超えることになってしまった。ICT環境の脆弱さもあり、想定以上に生徒の先行研究調査や参考資料の検索に時間がかかってしまったことが大きな原因の一つである。また、本校の教育課程上、これ以上SS研究の単位数を増やすことが困難であるため、なお一層のカリキュラムの精査が必要である。